

韓国語の動詞 ‘twol- (回る)’ の使役動詞に関する歴史的研究*

チャン コウン
張 高慤

ソウル大学大学院 国語国文学科 博士課程

jang2628@gmail.com

1. はじめに

現代韓国語では、“回転する”の意味を表す動詞‘twol-¹’の使役動詞として‘twol-li-’が使われている。‘twol-’と‘twol-li-’は、それぞれ日本語の‘回る’と‘回す’に該当するものであると理解しても良い。‘twol-’と同様に、‘twol-li-’も多義的であり、主に“回転させる”、“方向を転換させる”、“配る”などの意味で用いられている。また、現代韓国語で“返す”の意味は‘twol-li-e-cwu- (返す lit. 回して与える)’、‘twol-li-e-pwonay- (送り返す lit. 回して送る)’という複合動詞 (compound verb) で表される。この場合にも‘twol-li-’がその構成要素として使われている。ところが、中世韓国語の時期に現れる‘twol-li-’の遡及形の‘twol-fii-’は、現代の用法とは異なり、‘twol-’の典型的な使役動詞として機能していなかった。

‘twol-’は中世韓国語の時期に2つの使役動詞、すなわち、{-o-}系の‘twol-o-’と{-i-}系の‘twol-fii-’を派生し、これらの動詞は意味が異なっていたことが知られている。つまり、‘twol-o-’は“折り返し点を回らせる”の意味を、‘twol-fii-’は“くるくる回す”の意味を担っていたと言われる。理解を助けるため図で表すと、以下の通りである。

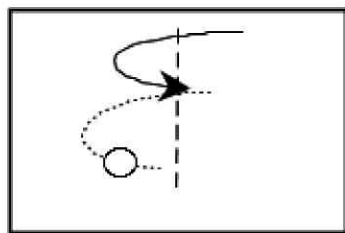


図1 “折り返し点を回らせる”

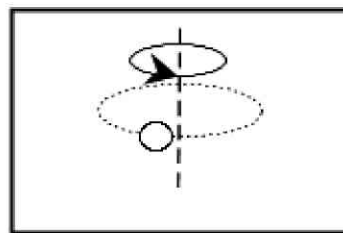


図2 “くるくる回す”

そして“返す”の意味は‘twolwo cwu-’という構成、または‘twol-fi-a-pwonay-’のような‘twol-o-’と‘pwonay-’の複合動詞として表現された。とすると、現代韓国語の‘twol-li-’は、中世の

‘*twol-o-*’の担当していた意味用法も含むようになったため、中世から現代に至るまでの間にその用法の拡張がなされたと言える。

以上の点の妥当性をみとめるならば、ここで 3 つの問いが立てられる。1 つ目は、‘*twol-li-*’の意味拡張はどのような様相でなされていたのかという点である。ある語彙の意味が拡張したということは、本来その意味を担っていた他の語彙の立場から見ると意味が縮小したことを示唆する。したがって、‘*twol-li-*’が‘*twol-o-*’の意味領域をどのように侵食し始めるのかを明らかにすることが必要である。2 つ目は、‘*twol-li-*’の意味拡張に一定の傾向が見られるならば、それをどのように解釈し得るのかという点である。3 つ目は、もし傾向があったとすれば、それは個別の語彙レベルのものか、それとも文法レベルのものであるかという点である。本稿は‘*twol-*’の使役動詞の事例研究を通じて、最終的には韓国語の使役法の変遷に関する議論の糸口を探ろうとするものである。

本稿では 15 世紀から 19 世紀に至るまでの韓国語の文献資料を対象に研究を行った。研究の範囲内の資料は、ソウル大学朴鎮浩教授の中世・近代韓国語コーパスに基づき、検索プログラムとしては *uniconc* を用いた。漢文の原文がある文献は、できる限り韓国語の翻訳文と対比した²。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では韓国語の使役について簡単に紹介する。3 節で‘*twol-*’の 2 つの使役動詞、すなわち、‘*twol-o-*’と‘*twol-li-*’の意味用法とその歴史的な変化を示し、その変化には一定の傾向があることを示す。4 節では 3 節で示した傾向に関して、Hopper and Thompson (1980) の他動性仮説に基づいて、韓国語の使役法の変遷に関する仮説を立て、その一般化を図る。5 節では結論を述べる。

2. 韓国語の使役に関する基礎的考察

2.1. 韓国語の使役の 2 つの類型

韓国語の使役法に関する既存の論考においては、大体 2 つの種類の使役構文を認めている。その 1 つは‘*-i/hi/li/ki-*’（以下 {*-i-*}）、または、‘*-wu/kwu/chwu-*’（以下 {*-wu-*}）など使役接尾辞によって派生された使役動詞を用いた使役構文であり、もう 1 つは、‘*-key ha-*’という統語的な構成を用いた使役構文である。論者によっては、‘*kwongpwu-siki-ta*（勉強させる）’の‘*-siki-*’も派生接辞として認め、前者に含ませることもある。一般的にこれらをそれぞれ短形使役、長形使役と呼ぶ。前者は形態論的な使役、後者は統語論的な使

役とも言える（金圭哲 1995/2005: 372）。このような 2 つの種類の使役構文の意味とその統語的な性質に関する議論が、韓国語の使役に関する議論の主たるテーマである。

- (1) a. 내가 그 아이를 죽였다.

nay ka ku ai lul cwuk-i-ess-ta

1st.SG.NOM NOM that child ACC die-CAU-PAST-IND

「私があの子を殺した。」

- b. 내가 그 아이를 죽게 했다.

nay ka ku ai lul cwuk-key ha-ess-ta

1st.SG.NOM NOM that child ACC die-ADV do-PAST-IND

「私があの子を死なせた。」

(1a) は短形使役の例、(1b) は長形使役の例である。(1) の 2 つの文が同一の基底構造から導出されたとみる変形生成文法の見解のある一方で、この文がおのおのの直接性 (direct) と間接性 (indirect) という差を有し、異なる構造から成立したという、語彙論者的な立場の見解もみられる。直接性とは使役主が物理的な接触、または積極的な行為を通じて被使役主に影響を与えることを意味し、間接性とは使役主が指示行為、または消極的な行為を通じて被使役主に影響を与えることを意味する。これ以外にもこの 2 つの使役文の差について、指示的 (directive) / 調整的 (manipulate)、同時的 / 時差的、完結的 / 未完結的などの差が指摘されている。

2.2. 韓国語の使役動詞の派生

使役動詞の派生そのものについても様々な研究が進められている。接尾辞 {-i-} と {-wu-} はそれぞれ異なる形態素に起源を持つと見られ、2 つの部類は同一の統語意味機能を有する派生接尾辞として理解される。この 2 つの接尾辞の分布は共時的に説明し難いが、1 つの動詞語幹は 1 つの接尾辞とのみ結合する傾向がある。これは競合関係にある 2 つの接尾辞の間の阻止 (blocking) の結果として捉えられる。

この接尾辞は他動詞 (*mek-i*-[食べさせる]; *mek*-[食べる])、自動詞 (*cwuk-i*-[殺す]; *cwuk*-[死ぬ])、形容詞 (*nelb-hi*-[広げる]; *nelb*-[広い]) を語基 (base) として取り、使役動詞を

派生する。しかしながら、{-i-}と称した'-i-'、'-hi-'、'-li-'、'-ki-'は、起源的には1つの形態素の異形態であったものと推定されるが、これらの音韻論的な交替条件を共時的に記述するのは難しい。{-wu-}と称した'-wu-'、'-kwu-'、'-chwu-'の場合も同様である。したがって、金星奎(1987)ではこの接尾辞は共時的な生産力を持たないものとして捉えるべきであると述べている。すなわち、使役動詞の派生は通時的な現象であるということである。

中世韓国語の場合を見ると、{-i-}の遡及する形態素は'-i-'、'-fi-^{3'}'、'-j-'、'-hi-'、'-ki-'などで現れ、これらの交替条件は現代韓国語と比べると例外が少ないものの、不規則な場合も多い。{-wu-}の遡及する形態素も同様、'-wo-'、'-wu-'、'-fiwo-'、'-fiwu-'、'-hwo-'、'-hwu-'、'-kwo-'などの異形態を持ち、これらを合わせて{-wo-}とすると、{-wo-}もまたその音韻論的な交替条件を説明することが難しくなる(具本寛 1998)。

また、中世韓国語における{-i-}と{-wo-}の関係は現代韓国語と同じく、一種の競合関係にあると考えられる。1つの動詞が{-i-}と{-wo-}それぞれと結合して使役動詞を派生する場合はあまり見られないためである⁴。

一方、本稿で注目する'twol-o-'の{-o-}も、使役動詞を派生する接尾辞として知られている。'-o-'、'-u-'の異形態を有するこの接辞については、非常に生産性が低いことから、派生接辞として扱われていない場合もある。'twol-'を始め、'sal-(生きる)'、'il-(成る)'、'nil-(起こる)'、'kil-(長い)'としか結合しない⁵。これらの動詞は全て'I末音の一音節語幹で、声調的にも流動的な上声⁶であるという共通点がある。また、これらの動詞は{-o-}だけではなく、{-i-}または{-wo-}によって派生された使役動詞が存在するという共通点もある。このような点について先行研究では、{-o-}による派生動詞と{-i-}または{-wu-}による派生動詞の意味が互いに異なるため、阻止が起こらないものと解釈した(具本寛 1998: 276)。例えば、序論で述べたように、'twol-o'は“折り返し点を回らせる”の意味を、'twol-fi-'は“交代する”の意味を担っていたということである(許雄 1975: 172)。他にも'sal-o-(生かす)'と'sal-fi-(住ませる)'、'kil-o-(育てる)'と'kil-fiwu-(長くする)'などの意味の差を持ち、阻止が起こっていないと述べた。

以上のように使役動詞の派生についての共時的説明には様々な難点があるが、これを全面的に通時的な現象の残存としてのみ処理することは無理がある(宋喆儀 1992: 183-7)。それは、新しい使役動詞が派生される例が見られるためである。例えば、前に例を挙げた“広げる”の意味の'nelb-hi-'は、語基になる動詞の語幹が'nel->nelb-'の再構造化を経た後、

新たに登場したものである。また、‘l’末音の‘el- (凍る)’の使役動詞は、‘el-fiwu- (凍らせる)’から‘el-li-’へと変わっているが、他の‘l’末音の動詞から類推されたものと理解される。したがって、本稿は使役動詞の派生が通時的な側面はあるものの、接辞によって使役性を加える文法意識が共時的にも存在するという観点をとる。

ところで、これらの接尾辞による動詞について‘使役動詞’という用語が用いられているが、厳密には‘使役’と言い難いところが多い。例えば、‘hyang ul phi-wu-ta (香を焚く)’、‘cason eykey yusan ul nam-ki-ta (子孫に遺産を残す)’の‘phi-wu- (焚く)’と‘nam-ki- (残す)’などがその例である。これについては、早くも許雄 (1975: 168-70) において、‘使役動詞’と呼ばれるものの一部を、拘束または許容の意味なく他動詞として使われるものとし、それらを“他動性が添加された語と定義するのが最も相応しい”とする卓見が述べられている。本稿においてもこれらの接尾辞を以上の観点から捉えていく。先行研究との関連性を考慮し、この接尾辞によって派生した動詞を‘使役動詞’という用語で称して議論を進めることとする。

3. ‘twol-’の使役動詞における意味用法の発達様相

3.1. 中世韓国語の時期

上述のように、‘twol-’は中世韓国語の時期に‘twol-o-’と‘twol-fi’という2つの使役動詞を派生した。その意味と用法を具体的にみると以下の通りである。まず、(2) から (4) は15世紀に見られる‘twol-o-’の用法の例である。

- (2) 秦嶺에 시름하야 馬를 돌아 오고 (秦嶺愁回馬) <1481 分類杜工部詩諺解-初刊本 8:60a>

Cinlyeng ey silumho-ya mol ol twol-fi-a wo-kwo

cinlyeng LOC feel.sad-ADV horse ACC turn-CAU-ADV come-CONN

「秦嶺で愁えて馬を返して来て」

- (3) 부텃 像을 만히 그리스바 녀느 나라해 골오 돌아 供養하스바 <1447 釋譜詳節 24:10b>

(今當圖畫佛之形像 分布諸國咸得供養 <釋迦譜: 82c12(00)>)

pwuthye s sang ol manh-i kuli-zoß-a nyenu nalah ay

Buddha GEN picture ACC a.lot-ADV draw-HON-ADV several country LOC

kwolo twol-f-a kongyangho-zoß-a

equally turn-CAU-ADV offer-HON-ADV

「仏様の像を沢山描き申し上げ、他の国に等しく回して供養し申し上げ」

(4) 須彌를 돌아 맞고 土山 黒山이 이쇼되 <1459 月印釋譜 18:47a>

(環須彌之外 有土山黒山 <法華經要解: 349b07(00)>)

Sumi lol twol-f-a pask uy twosan huksan i isi-wotoy

Mt.Sumeru ACC turn-CAU-ADV outside LOC Mt.Twosan Mt.Huksan NOM exist-CONN

「須彌をめぐって外に土山、黒山があるが」

(2) に見られるように、‘*twol-o-*’は主に漢文の‘回’の訳語として、‘頭、馬、車’などを目的語として取り、“向かっている方向を変える、転換する”の意味で用いられた。語基の‘*twol-*’そのものも“転換”の意味を持っているため、その使役動詞である‘*twol-o-*’のこの用法も自然に説明できる。(3) は‘*twol-o-*’が漢文の‘布’に該当する例で、仏の像を他の様々な国に“もれなく回す”、すなわち、“配布”の意味で用いた例である。‘*twol-*’には“配布”の意味はないが、“回転”の意味から一定の範囲内に対象が移動することを表す拡張された意味がある。‘*swulcan i twol-ta* (杯が^{めぐ}回る)’のような例がそのものである。この意味に使役の意味が加ることにより、その移動の結果、対象が一定の範囲内に伝達されることを意味することができるようになる。例えば、現代韓国語の‘*pan ey calyo lul twol-li-ta* (lit. クラスに資料を回す)’、‘*ttek ul twol-li-ta* (lit. お餅を回す)’などで用いられた‘*twol-li-*’の意味がそれである。(4) は“巻く、廻る”の意味で用いられた例であるが、‘*twol-o-*’がこのような意味で用いられたのは文献上 2 例に過ぎない。“巻く”の意味も、ある物体を中心として回転した結果、その中心である物体を巻いたという点で“回転する”との意味的な関連性が見られる。このような用法は、主に‘*twol-o-*’の母音調和による対の‘*twulu-*’が担当し、現代韓国語に至っている。

一方、‘*twol-fii-*’は 15 世紀の文献にはみられない。‘*twol-fii-*’が文証される最初の例は 16 世紀初のものである。その例を挙げると以下の通りである。

- (5) 손이 오나든 일찍 잔치 아니하신 저기 업수디 혹 세 번식 돌이며 혹 다섯 번식 돌여
 닐굽 번의 너므디 아니하며 (客至어든 未嘗不 置酒호디 或三行或五行이오
 不過七行하며) <1518 翻譯小學 10:32a>

Son i o-nadon ilcuk canchi aniho-si-n cek i eps-wutoy
 guest NOM come-COND early party not.do-HON-GER time NOM no-CONN
hok sey pen-sik tol-(h)i⁸-mye hok tasos pen-sik tol-(h)i-e
 or three times-PL turn-CAU-CONN or five times-PL turn-CAU-ADV
nilkwup pen uy nemu-ti aniho-mye
 seven times LOC excess-ADV not.do-CONN

「客が来たら、かつて宴をなされなかったことが無かったが、あるいは三回ずつめぐらし、あるいは五回ずつめぐらして、七回を超えず」(cf. 「客至らば未だ嘗て酒を置かずんばあらず。或は三行、或は五行、七行を過ぎず」)

- (6) 우리 각각 저그나 자고 돌여 니러 브즈러니 몰 머기저 (咱們各自睡些個
 輪着起來勤喂馬) <1517 翻譯老乞大 上:25a>

wuli kakkak cyek-una ca-ko tol-(h)i-e nil-e
 1st.PL each little-ADV sleep-CONN take.turns-CAU-ADV wake-ADV
puculen-i mol mek-i-cye
 diligent-ADV horse eat-CAU-PROPOSE

「我ら各々少し寝て、交代に起きて勤勉に馬を飼おう。」

(5) は‘*twol-fii-*’が行酒、すなわち、杯を巡らすという“伝達”の意味として用いられた例であり、(6)は“輪”、すなわち“交代で”の意味で用いられた例である。“伝達”の意味は、先に“分配”についての説明のところで述べたように、‘*twol-*’の“回転”の意味から対象が一定の範囲内に移動することへと拡張された意味として考えられる。“交代する”の場合は、このような“伝達”が更に抽象化されたものとして捉えられる。杯のような具体的な物体ではなく、次第、または、順番という抽象的な概念が一定の範囲内の人々の間を回ることとして捉えられる。このような“交代する”という意味を表すのは‘*twol-fii-*’の主な用法であり、19世紀まで活発に用いられていた。しかしながら、現代韓国語の‘*twol-li-*’にはこのような

用法はない。この意味を表すためには、‘*twol-a-ka-* (lit. 回して行く)’、‘*pen-kal-* (lit. 番変える)’など、他の表現を用いなければならない。その理由については4節で考察する。

この時期に‘*twol-*’の使役動詞が“回転させる”の逐字的な意味として用いた例は見出されないが、これは文献資料の量的制約によるものである可能性もある。

以上のような中世韓国語の時期の‘*twol-*’の使役動詞の意味分化を図に示すと以下の通りである。

意味	巻く	交代	伝達	回転	分配	転換
	<i>twulu-/</i> <i>twol-wo-</i>	<i>twol-fii</i>		*	<i>twol-o-</i>	

図3 中世韓国語の時期の‘*twol-*’の使役動詞の意味分化

3.2. 近代韓国語の時期

近代韓国語の時期に入ると、‘*twol-o-*’と‘*twol-fii-*’の振る舞いは大きく変化した。まず、‘*twol-fii-*’は、17世紀以降‘*twol-li-*’で現れ、以前の意味用法と共に“回転させる”という新しい用法を獲得する。

(7) 핑이 돌리다 (碾掇落子) <1690 譯語類解 下:23b>

phingi tol-li-ta

top turn-CAU-IND

「こまを回す。」

それに対し、‘*twol-o-*’は形態的にも活用上大きな変化を経て、意味的にも全く新しい意味の“反芻する、吐く”への拡張を見せる。

(8) a. 15世紀 도르고 *twol-o-kwo*; 돌아 *twol-fi-a*

b. 17世紀 도로고 *twol-wo-kwo*; 돌와 *twol-wo-a*, 도라 *twol-a*

c. 17世紀 도르고 *twolu-kwo*; 돌라 *twoll-a*

(8) は子音で始まる語尾および母音で始まる語尾との結合における‘*twol-o-*’の活用上の変化を表したものである。(8c)のような変化は‘*twol-o-*’がいわゆる‘*lu*’不規則活用動詞へと再構造化されたことを示す。この変化により、接尾辞 {-o-} の活用上の特殊性を失い、‘*twolwo-*’、ないしは‘*twolu-*’自体が、もはや派生動詞として把握されにくくなったものともみなすことができる。

(9) は、“反芻”の意味で使われた‘*twolu-*’の例である。

(9) 쇼 여믐 도로다 (倒嚼、回食) <1690 譯語類解 下:31a>

syo yemul twol-wo-ta

cow chaff turn-CAU-IND

「牛がまぐさを反芻する。」

“反芻する、吐く”の意味は本来の摂取の方向とは反対側への動きを意味する点で、以前時代の‘*twol-o-*’の持った“転換”の意味とある程度意味的な関連性を有する。このような用法は、現代の一部の方言に残されている。

18 世紀に至ると、‘*twolu-*’の用法は非常に狭められ、‘*twol-li-*’の用法は拡大してゆく。この時期、‘*twolu-*’の意味は、自身が 15 世紀から有してきた基本的な意味である“転換”と、最も最近形成された派生意味の“吐く”に限られる。それに対し、‘*twol-li-*’はその以前から有した“交代”、“伝達”、“分配”、“回転”の意味に加え、“転換”の意味も示すようになる。

(10) 관원이 물을 돌여 들어가매 <17-- 乙丙燕行錄 9:30>

kwanwen i mol ul tol-i-e tul-e-ka-may

officer NOM horse ACC turn-CAU-ADV enter-GER-go-CONN

「官員が馬を回して入るのに」

実のところ、18 世紀に“転換”の意味として用いた例は (10) の一例に過ぎず、さらに<乙丙燕行錄>という文献は 18 世紀の洪大容 (1731~1783) が書いたものとして知られているが、現存するのは 19 世紀にその子孫が筆写したものであるため、厳密には 18 世紀の変化の例だと言うことには疑問の余地もあろう。しかし、‘*twol-li-*’のこのような用法は 19 世

紀の文献に全面的に範囲を拡大して現れるため、18 世紀から 19 世紀に至る間にこのような意味拡張が起こったことは確かである。したがって、この時期になると、‘*twol-li-*’は“転換”、“回転”、“伝達”、“交代”の意味を担い、‘*twol-*’の使役動詞として機能するようになったとも言える。

反面、‘*twolu-*’は、もはや‘*twol-*’の使役動詞とはみなしにくくなる。19 世紀の文献では‘*twolu-*’が単独で“転換”の意味を表す例はみられず、“返す”の意味を表す‘*twoln-a-cwu-*’ (lit. 回して与える) ‘、‘*twol-a-pwonay-*’ (lit. 回して送る) ‘のような複合語の中にのみその痕跡を留めている。

- (11) 그 것엇든 돈을 베갑만 주고 도로 돌나쥬엇다더라 <1898 毎日新報 56 号 1898. 6. 13.>

Ku kes-es-tu-n twon ul pey-kap man cyu-kwo
that collect-PAST-PAST-GER money ACC cloth-price only give-CONN
twolwo twoln-a-cyu-es-ta-te-la
again turn-GER-give-PAST-IND-PAST-IND
「その取り立てたお金を麻布の代価だけ払い、元に返したという。」

- (12) 남의 거슬 빌어오고 도라보닌지 아니하며 <1852 太上感應篇 大文解:08a>

nam uy kes ol pil-e-wo-kwo twol-a-pwonoy-ci
others GEN thing ACC lend-GER-come-CONN turn-GER-send-ADV
aniho-mye
not.do-CONN
「人のものを借りてきて送り返さず」

しかしながら、このような痕跡さえも、19 世紀末から 20 世紀初の間に‘*twol-li-*’による複合語の‘*twol-li-e-cwu-*’、‘*twol-li-e-pwonay-*’に置き換わる。

- (13) 이 물건을 누가 맞앗스며 어느 사룸의게 돌너주엇느냐 <1907 京郷寶鑑 2:365>

i mwulken ul nwi ka mash-ass-umye eno salom uykey
this thing ACC who.NOM NOM keep-PAST-CONN which person DAT

twol-ni-e-cwu-es-nonya

turn-CAU-GER-give-PAST-INTER

「これを誰が預かって、どの人に返したのか。」

- (14) 그 안의 시종을 다 한국 외부 대신의게 돌녀보닌여 <1897 獨立新聞 2 卷 141 号 1897.11.27>

ku an uy sicyong ul ta hankwuk woyprwu taysin uykey

that within LOC attendant ACC all Korea diplomatic minister DAT

twol-ni-e-pwonoy-e

turn-CAU-GER-send-ADV

「その内の侍従を皆韓国外部大臣に送って」

以上のような‘*twol-fi-a-pwonay-*’>‘*twol-li-e-pwonay-*’への変化は、‘*twol-li-*’が“転換”の意味を完全に獲得した後、または‘*twolu-*’が“転換”の意味を失った後に起こった。これは複合動詞である‘*V-e-V*’の構成の内部を分析的に認識しようとする話者の欲求の反映とも見られる。

一方、19世紀に‘*twolu-*’は、“盗む”という新しい意味への拡張も見せる。

- (15) 김춘명 집에 나제 들어가서 조금 한섬을 돌나 가지고 가다가 <1986 獨立新聞 1 卷 87 号 1896.10.24>

Kim.Chyunmyeng cip ey nac yey tul-e-ka-sye

Kim.chyunmyeng house LOC day LOC enter-GER-go-CONN

Syokum han syem ul twoln-a kaci-ko ka-taka

salt one unit ACC steal-ADV take-CONN go-CONN

「キムチュンミョンの家に昼間入って、塩一石を盗んで持ってゆく途中」

“盗む”の意味は主に<獨立新聞>1 卷 (1896) に多くみられる。この用法は現代の全南方言の‘*twolu-*’、‘*twoll-a-ka-*’に繋がる。“盗む”への意味拡張は‘*twol-o-*’/‘*twulu-*’の意味である“巻く”に由来するものと考えられる。ある対象を巻いた結果、その対象が見えなくなり、ここからメタファーによって相手に真実を隠して見せない、すなわち、“騙す”に拡張され得る。中央語の‘*twull-e-tay-*’ (言い逃れる lit. 巻いて言う) のような複合動詞はこの“騙

す”の意味の反映だともいえる。“盗む”は、ここでまた、相手を騙して対象をこっそり取る行為というメトニミー的に拡張した意味として捉えられる（崔銓承 2009: 284）。このような“巻く”→“騙す”→“盗む”の連鎖的な意味拡張が全南方言に限られる現象なのか、それとも中央方言にも起こりはしたものの、中央方言の場合、“盗む”の意味はまた‘hwumchi-’など他の語彙に置き換わったものなのかについては、更なる検討が必要である。

3.3. 小結

これまで見た‘twol-o-’と‘twol-fii-’及びその後代形の意味用法上の変化を、現代の形態も含めて図で表すと以下の通りである。網掛けは‘twol-fii-’及び‘twol-li-’の意味領域を表す。

意味 時期	巻く	交代	伝達	回転	転換 分配	複合語の 内部	吐く	盗む
15 世紀	<i>twulu- /twol-o-</i>	*	*	*	<i>twol-o-</i>	<i>twol-o-</i>		
16 世紀	<i>twulu- /twol-o-</i>	<i>twol-fii-</i>		*		*		
17 世紀	<i>twulu- /twolu-</i>		<i>twol-li-</i>		<i>twolu-</i>	<i>twolu-</i>	<i>twolu-</i>	
18 世紀	<i>twulu-</i>			<i>twol-li-</i>		<i>twolu-</i>	<i>twolu-</i>	
19 世紀	<i>twulu-</i>			<i>twol-li-</i>		<i>twol-li-</i>	<i>twolu-</i>	<i>twolu-</i>
現代	<i>twulu-</i>	<i>twol-a- ga-</i>		<i>twol-li-</i>		<i>twol-li-</i>	<i>twolu- (方言)</i>	<i>twolu- (方言)</i>
			<i>twol-key ha-</i>					

図 4 ‘twol-(回る)’の使役動詞の意味の変化

図 4 で示したように‘twol-li-’の意味の拡張と‘twol-o-’の意味の縮小には、ある方向性が見られる。中世韓国語の時期の‘twol-fii-’は“交代する”、“伝達する”など、使役の程度の低い意味を担当していた。それに対し‘twol-o-’は、語基である‘twol-’の意味の“回転”と“転換”に使役性が加わった使役動詞としての振る舞いを見せた。しかしながら、近代韓国語の時期に入って、‘twol-fii-’の後代形の‘twol-li-’が‘交代、伝達’→‘回転させる’→‘転換させる’の一連の意味拡張によって‘twol-’の使役動詞としての地位を獲得した。その反面、‘twol-o-’は本来

の意味領域を'twol-li-'に侵蝕され、派生された意味である“巻く”、“吐く”、“盗む”の意味用法のみが残されることとなった。

このような'twol-li-'の意味拡張の方向は何を示しているのでしょうか。以下では Hopper and Thompson (1980) の他動性 (transitivity) の概念を用い、その方向性の解釈を試みたい。

4. 他動性と意味拡張

4.1. 意味的他動性の概念

他動性 (transitivity) とは、人間の言語の諸現象を説明する重要な概念の 1 つである。他動性に対する観点には、大きく 2 つがある。1 つ目の形式的な観点は、他動性を動詞が要求する項の数と、その項が取る標識を中心に見ようとするものである。韓国語の分析にあげると、動詞が必須とする項が目的格標識'-ul/lul (を)'を取っているかを基準として、他動詞と自動詞、あるいは自他兼用動詞を区別する。このような形式的な観点は、他動性を動詞の属性として捉え、二分法的な概念としてみなすものである。

これに対し、2 つ目の意味的な観点は、我々が他動性に関して持っている直観により近い。この観点では、他動性を文全般の属性として捉え、行為者 (agent) から対象 (patient) へのある行為が'伝えられて (transfer)'影響を及ぼすものとして定義する (Hopper and Thompson 1980: 252)。この定義によると、意志を有する行為者が意図的に行為をすればするほど、対象が全面的に影響を与えられれば与えられるほど、他動性の程度が高い文であるということになる¹⁰。重要なのは、この観点は他動性を二分法的な概念ではなく、程度性を持った連続的な概念とすることである。

Hopper and Thompson (1980) は、他動性が文の様々な要素に表われることを明らかにした。彼らによると、対象が目的語として実現されるのは、文の他動性を構成する多くの要素の中の 1 つである。彼らは、他動性の要素として次のような 10 項の変数を挙げて論じた。すなわち、ある文が左側の項目を持つほど他動性が高く、右側の項目を持つほど他動性が低いということを示した。

表 1 他動性の変数(Hopper and Thompson 1980:252)

	High Transitivity	Low Transitivity
A Participants	2 or more participants	1 participant
B Kinesis	Action	Non-action(=state)
C Aspect	Telic	Atelic
D Punctuality	Punctual	Non-punctual
E Volitionality	Volitional	Non-volitional
F Affirmation	Affirmative	Negative
G Mode	Realis	Irrealis
H Agency	A high in potency	A low in potency
I Affectedness of O	O totally affected	O not affected
J Individuation of O	O highly individuated	non-individuated (include reflexive)

すなわち、文に、二人の参加者が表れ（A）、意志を持った行為者が（H）意図的に（E）、終わりがある（C）瞬間的に成り立つ（D）行為を（B）して（F、G）、対象が（J）大きな影響を被る（I）場合、その文は高い他動性を表わすということである。

このように、他動性を意味的な概念として捉えると、韓国語の記述においてもいくつかの利点がある。その 1 つが、2 節で見た使役構文の 2 つの類型に対する説明である。これまで短形使役と長形使役の差として指摘されてきた直接性／間接性、指示性／調整性、同時性／時差性、完結性／未完結性などの差は、全て他動性の差とすることができる（金圭哲 2001/2005: 394-406）。

使役構文は、概念的に他動性の高い構文である。なぜなら、表 1 の他動性の変数に照らしてみると、使役構文の表す事態には必ず、少なくとも二人以上が参与し、一人の参与者の触発した行為によって、他の参与者はその影響を受けるためである（Hopper and Thompson 1980: 264）。韓国語の短形使役の特徴として述べられた直接性、指示性、原因事件と結果事件の同時発生性、行為の完結性などは、この他動性の高い文の特徴と同様であり、典型的な使役だともいえる。一方、使役の事態ではあるものの、相対的に他動性の低い表現が求められる場合もあり得る。つまり、使役主の意図性が低いとか、間接的に影響を受けるとか、被使役主がその影響を少しだけ受けるとか、あるいはあまり影響されないなどといった場合の表現がそれにあたる。このようなことは、まさに長形使役の特徴として言及されてきたものである。

勿論、韓国語には目的語の指示性（referentiality）や被影響性、主体の意思やアスペク

トなどを形態・統語論的に明示的に表す標識はない。したがって、短形使役と長形使役の差として指摘し得る他動性の程度を客観的に証明するのは難しい。しかしたとえそうであっても、実際に話者は直観的にその他動性の差を知り、それを言語で表現しているものと考えられる。

4.2. ‘*twol-li-*’の意味拡張と他動性の獲得

本節では、前節で示した文を中心に、‘*twol-li-*’の意味拡張が他動性を獲得していく方向性を持っているという点を示したい。まず、‘*twol-li-*’が“交代に”の意味で用いられた例を分析してみる。

- (16)=(6) 우리 각각 저그나 자고 돌여 니러 브즈러니 몰 머기저 <1517 翻譯老乞大 上:25a>

wuli kakkak cyek-una ca-ko tol-(h)i-e nil-e

1st.PL each little-ADV sleep-CONN take.turns-CAU-ADV wake-ADV

puculen-i mol mek-i-cye

diligent-ADV horse eat-CAU-PROPOSE

「我ら各々少し寝て、交代に起きて勤勉に馬を飼おう。」

(16)で見られるように、目的語は明示的には現われないが、‘番(回)、順番、手順’などが想定できる。実際に、‘*pen twol-li-ta 輪番* (lit. 番回す)’ (1790 蒙語類解 上:39a) のような例も現われる。このような名詞は抽象的なものであり、回す行為による何らかの影響を受けるとは考え難い。目的語として現れた対象は、順番を交代するという行為自体が抽象的なものであるため、行為の瞬間性やアスペクトについても論じ難い。したがって、“交代する”の意味は、非常に他動性が低いといえる。

使役の定義に照らしてみると、このような“交代する”の意味の文には、被行為者も現れず、対象である順番が行為による何らかの影響を受けないため、使役とは認め難い。‘*twol-li-*’が最初に有していた意味が、このような他動性の低いものだという点については、裏を返せば、まさにその意味を担当するために‘*twol-li-*’が派生されたものと解釈する余地もある。既存の使役動詞である‘*twol-o-*’が高い他動性の文脈を担っているため、より抽象的な、

他動性の低い文脈を表現するために、新しい派生語が要求されたのだろう。おそらくその際、中世韓国語の時期に使役接尾辞として広く使われていた {-i}が、その派生の候補に挙げられたのであろうと思われる。

このような仮説は、現代韓国語の'twol-li-'がその当初の意味である“交代する”の意味としては使われないという点にも合致する。現代には'twol-li-'が高い他動性の意味を担って、典型的な使役動詞として機能するようになったため、他動性の低い“交代する”の意味としては、使われることができなくなったのであろう。現代韓国語で“交代する”の意味を表すためには、'twol-a-ka- (lit. 回って行く)'、もしくは'pen-kal- (lit. 番変える)'を用いている。'twol-a-ka-'が“交代する”の意味を表すようになったのは、おそらく'twol-li-'が高い他動性の意味を獲得した以後と考えられる¹¹。

次に、“伝達する”の意味として使われた'twol-li-'の例を見よう。

(17)=(5) 손이 오나든 [...] 혹 세 번식 돌이며 혹 다섯 번식 돌여 <1518 翻譯小學 10:32a>

son i o-nadon [...] hok sey pen-sik *tol-(h)i-mye* hok tasos pen-sik *tol-(h)i-e*
 guest NOM come-COND [...] or three times-PL turn-CAU-CONN or five times-PL
 turn-CAU-ADV

「客が来たら、[...] あるいは三回ずつめぐらし、あるいは五回ずつめぐらして、」

“伝達する”の行為の対象は、(17)では明示されていないが、杯である。これは順番という抽象的な名詞よりは、具体性と個別性を持つものを指す名詞であり、動詞の行為によって位置の移動という影響を受ける。しかし、その行為は次に挙げる“分配”に比べると、持続性の差がある。“分配”の場合は、複数の対象の移動が一回に終わるが、“伝達”の場合は、対象の移動が繰り返されて一定の経路に沿って元の位置に戻ることが前提となる。

“分配”の例を見よう。これは(18)のように'twol-o-'が担っていた意味であった。

(18)=(3) 부텃 像을 만히 그리스바 녀느 나라해 골오 돌아 供養ᄃ스바 <1447 釋譜詳節 24:10b>

pwuthye s sang ol manhi kuli-zoß-a nyenu nalah ay

Buddha GEN picture ACC a.lot-ADV draw-HON-ADV several country LOC

kwolo twolh-a kongyangho-zoß-a

equally turn-CAU-ADV offer-HON-ADV

「仏様の像を沢山描き申し上げ、他の国に等しく回して供養し申し上げ」

(18) で“分配”の対象は明示されていないが、文脈上‘仏の像’という個別性を持つ名詞である。ここでは“分配”という行為によってその位置が移動する。上に述べたように、“分配”は一気に終わる行為であり、“伝達”に比べて相対的に *telic* のアスペクトを持ち、その意味は高い他動性を有するともいえる。

このような差は、現代韓国語の‘*twol-li-*’と‘*twol-key ha-*’の使い分けからも見られる。

(19) a. *swulcan ul twol-li-ta ; swulcan ul twol-key ha-ta*

「杯を回す」；「杯を回らせる」

b. *sinmwun ul twol-li-ta ; *sinmwun ul twol-key ha-ta*

「新聞を回す」；「*新聞を回らせる」

(19a) “伝達”の例、(19b) は“分配”の例として挙げられたものである。(19) で見るように、“伝達”の場合は短形使役構文でも、長形使役構文でも表現されるが、“分配”の場合は短形使役のみ使われて、長形使役構文は使うことができない。短形使役と長形使役が、それぞれ他動性の差を反映する方策であるのなら、(19) のような振る舞いは“分配”の場合が“伝達”より高い他動性の意味を表すためであるという解釈ができる。

最後に、“対象の方向を変える”の意味の例である (20) を見よう。

(20)=(10) 관원이 물을 돌여 들어가매 <17-- 乙丙燕行錄 9:30>

kwanwen i mol ul tol-i-e tul-e-ka-may

officer NOM horse ACC turn-CAU-ADV enter-GER-go-CONN

「官員が馬を回して入るのに」

(20) のように‘馬’など、具体的な対象が“転換”という行為によって向かう方向が変わるという影響を受ける。“転換”の行為は *telic* なアスペクトを有する意図的な行為である。したがって、“対象の方向を変える”という意味の構文は、高い他動性を持っているといえる。

結局、図 3 の意味分化は他動性の差を反映し、図 4 に示した‘*twol-li-*’の意味拡張の方向は、低い他動性の領域から、徐々に高い他動性の領域への変化だといえる。この点を合わせて表すと以下のようなになる。

意味領域	交代	伝達	回転	分配	転換	
‘ <i>twol-li-</i> ’の意味拡張						
他動性	低い					高い

図 5 ‘*twol-li-*’の意味拡張と他動性の関係

4.3. ‘*sal-li-*’の意味拡張と他動性

最後に、3 つ目の問題を考える。つまり、図 5 に示した意味拡張は、‘*twol-li-*’という個別的な語に限られる変化なのか、それとも使役接辞‘*-li-*’に関わっている 文法的な次元の変化なのか、という問いである。これに関し、本稿ではまだ結論を出すことができていない。だが、‘*twol-li-*’の意味拡張と非常に類似した様相を‘*sal-li-*’の場合にも見ることができることを指摘しておきたい。‘*sal-*（生、居）’も後期中世韓国語の時期、‘*sal-o-*’と‘*sal-fi-*’という 2 つの使役動詞を持っていた。これらはそれぞれ“生かせる”、“居させる”という意味を持っていたとされている（李基文 1972: 161、安秉禧・李珣鎬 1990: 134）。次の例を見てみよう。

- (21) 내사 주거도 프던커니와 이 아드를 사르고라 (我不惜死 乞活此兒) <1481 三綱行實圖-ロンドン本 孝:20>

nay za cwuk-e-two mutenh-keniwa i adol ul sal-o-kwola

1st.SG.NOM just die-ADV-INTS fair-CONN this son ACC live-CAU-OPT

「私は死んでもかまわないけども、この息子を活かしてくれるようにと。」

- (22) 孟母 | 니르샤디 이 眞實로 가히 뼈 아들 살을 디라 헉시고 <1475 內訓 3:13a>

mayngmo i nilo-si-wodoy i cinsil-lwo ka-hi psu-e
 mother.of.Mencius NOM say-HON-CONN this really-ADV allow-ADV use-ADV
 adol **sal-fi-wo-l** doy-(i)-la ho-si-kwo
 son reside-CAU-OM-GER place-(COP)-IND say-HON-CONN

「孟子の母がおっしゃるには、ここは真に息子を居らしめるべきところであると
 おっしゃって」

- (23) 白馬寺 | 라 흠 덜 이르샤 두 주을 살에 헉시고 <1459 月印釋譜 2:67a>

(別立一寺。與騰蘭居之。以白馬馱經而來。遂名曰白馬寺。<釋氏通鑑:16a13(04)>)

paykmasa-i-la ho-wo-l tyel il-u-si-a
 paykma.temple-COP-IND say-OM-GER temple build-CAU-HON-ADV
 twu cyung ul **sal-ey** ho-si-kwo
 two monk ACC reside-ADV do-HON-CONN

「白馬寺という寺を建てて、二人の僧を住まわせて」

(21) は“命を助ける、生かす”という意味の‘sal-o-’の例であり、(22) は“あるところに住まわせる、居させる”の意味の‘sal-fi-’の例である。(23) は(22) と同じ文脈で、長形使役の‘-key ho-’が用いられた例である。‘twol-’の2つの使役動詞と同じく、‘sal-o-’と‘sal-fi-’の関係も他動性の差として解釈できる。なぜなら、“命を助ける、生かす”の場合は対象の生命に直接関わっているため、行為による対象の被影響性の程度が高く、“住まわせる”の場合は、ただ対象の居場所を指定する点で行為による対象の被影響性が低いからである。他動性の低い意味は(23)で見られるように、‘-key ho-’のように統語的な使役としても表された。

このような意味領域の分担は、近代韓国語の時期に入って変化した。その様相は‘twol-’の使役動詞の変化と酷似している。18世紀以降、‘sal-fi-’の後代型である‘sal-li-’は“居させる”の意味と共に“生かす”の意味としても使われ始める。例は以下の通りである。

- (24) 아비 나히 늙으니 빌건대 살리쇼셔 <1797 五倫行實圖 孝:32b>

api nah I nulk-uni pil-kentay sal-li-syosye

father age NOM old-CONN wish-CONN live-CAU-OPT

「父が年老いているので、乞うらくは命をお助けて下さい。」

その反面、‘sal-o-’は、‘sal-wo-’、‘salwo-’、‘salu-’などの語幹再構造化を経て、18世紀までは“命を助ける”の意味として使われた。だが、19世紀に入ると、そのような用法が急激に減り、‘salo-cap-（生け捕る）’のような複合動詞の中にだけ見られるようになる。一方、19世紀になると、‘sal-li-’が“住まわせる”の意味として用いられた例は、ほとんど見られなくなり、専ら“命を助ける”の意味用法だけ有するようになる。これは現代韓国語でも同様で、“住まわせる”の意味を表すためには、長形使役を使う必要がある。

これまで見た‘sal-o-’と‘sal-ſi-’及びその後代形の意味用法上の変化を図で表すと、以下の通りである。網掛けは‘sal-ſi-’及び‘sal-li-’の意味領域を表す。

時期	使住	使生
15 世紀	sal-ſi-	sal-o-
16 世紀	sal-ſi-	sal-o-, sal-wo-
17 世紀	sal-li-	sal-o-, sal-wo-
18 世紀	sal-li-	sal-li- salwo-
19 世紀		sal-li-
現代		sal-li-

図 6 ‘sal-(生)’の使役動詞の意味分化とその変化

本来、他動性の高い意味領域を担っていた‘sal-o-’に比べて、他動性の低い意味を担当していた‘sal-li-’が、徐々に他動性の高い意味を表すようになり、本来‘sal-o-’の持っていた意味領域を奪った。その結果、自身が元々有していた他動性の低い意味としてはもう用いられなくなる、あるいは、用いられることができなくなるという様相は、先に見た‘twol-’の使役動詞の変化と類似している。この2つの事例は、派生接辞‘-li-’の用法の拡大と、意味的な他動性との間の相関性を示唆するものである。

5. 結論

本稿は‘*twol-*’の使役動詞の歴史的な変遷過程を示し、以下の点を明らかにした。

- 1) 後期中世韓国語の時期‘*twol-o-*’は高い他動性を表し、‘*twol-ſi-*’は他動性の低い意味領域を担った。
- 2) ‘*twol-ſi-*’の後代形の‘*twol-li-*’は、近代韓国語の時期以来、徐々に他動性の高い意味も表現するようになり、‘*twol-o-*’に代わる‘*twol-*’の使役動詞となった。
- 3) このような{-i-}による派生動詞の意味変化は‘*sal-ſi->sal-li-*’にもみられる。

これは従来、語彙的な次元における意味の差としてのみ扱われてきた2つの種類の使役動詞とその変化が、文法的な次元において扱われるべきものであることを示唆する。

本稿において議論することのできなかった、残された課題について述べると次の通りである。1点目は、接尾辞{-o-}による使役動詞を持つ‘*kil-*’、‘*nil-*’、‘*il-*’についての研究の必要性である。相対的に古形であると考えられる{-o-}派生に関する前期中世韓国語、古代韓国語への遡及的な研究と共に、方言に関する調査も必要である。2点目に、接尾辞{-i-}によって派生された動詞の意味とその変化に関する綿密な検討が必要である。3点目に、今まで意味の差が無いとみなされてきた双形の使役動詞の意味及び用法の差についての更なる検討が必要である。そして議論の範囲を拡大し、韓国語の使役動詞の派生とその変化全般を通時的な観点から議論する必要がある。

注

* 本稿の一部は、京都大学人間・環境学研究科（言語科学講座）山梨研究室に交換留学生として1年間滞在した際に行った研究に基づいている。

- 1 本稿のローマ字表記はYale Romanizationに従う。異表記の多い近代資料の場合、その異表記をそのまま転写しておいた。特に、‘o’は‘・’、‘u’は‘一’を表し、‘wo’は‘ㄱ’、‘wu’は‘ㅍ’を表している点に注意されたい。
- 2 仏典の翻訳文献の場合、CBETA 中華電子仏典協会 (<http://www.cbeta.org/index.htm>) を参照し、できる限り漢文の低経として推測される経典を探して比較した。その過程で河崎啓剛氏に多大なご助力を頂いた。
- 3 ‘o’の音価について、文字通り‘零’として見る場合と、‘[ŋ]’の摩擦音を表したと見る見解がある。本稿は語中の‘o’については、[k]の弱化した[ŋ]として捉える見解に従う。

- 4 例外的に、‘kiwul-i-’と‘kiwul-wu-’、‘mac-hi-’と‘mac-hwo-’、‘twot-hi-’と‘twot-hwo-’、‘nuch-i-’と‘nuch-wu-’のような例が挙げられるが、一部は意味の差があるとされる（具本寛 1998: 276）。
- 5 金星奎（1995）の再構によると、‘twulu-（巻く）’、‘pwulu-（潤、殖やす）’、‘elu-（娶る）’、‘wulu-（咆哮、叫ぶ）’の場合も接尾辞 {-o-} によって派生された動詞として見る可能性もある。
- 6 中世韓国語には音の高低に該当する声調という概念があり、文献の表記上それを傍点として表した。平声は無点、去声は一点、上声は二点で表記し、入声は別途の表記をせず、平上去と同じく表した。一方、ある語の語幹の声調が活用に関わらず、自身の声調を維持する場合、固定的な声調と呼び、活用によって変動する場合、流動的な声調と呼ぶ。流動的な上声とは、例えば語幹である‘돌-（twol）’が、‘:돌·고(twol.kwo)’のように子音の始まる語尾の前では上声を維持し、‘도·라(two.la)’のように母音の始まる語尾の前では平声に変わる場合、その語幹の声調を指す用語である。
- 7 ‘twol-o-’は、所謂特殊語幹交替を見せる動詞である。特殊語幹交替とは、‘twol-o-’が活用する時、子音で始まる語尾や助詞の前では‘도·고（twol-o-kwo）’のように、母音の始まる語尾や助詞の前では‘돌아（twol-fi-a）’のように活用する現象を表す用語である。このような交替には四種が存するが、いずれも二音節で平平形の声調を持ち、‘-o/u’末音を有するという共通点がある。‘*twol-ok-’のような古形を再講することのできるものである（李基文 1962）。
- 8 15世紀の‘ㅇ[h]’は摩擦音の音価を徐々に失い、16世紀に入ると、もはや完全に失われる。だとすると、16世紀に見られ始める(5)、(6)の例の‘ㅇ’を‘[h]’の音価を有するものと見ることは難しい。しかし、本稿では‘twol-fi-’も4.3で扱う‘sal-fi-’と同じく、15世紀から存在した語形であり、(5)、(6)の‘ㅇ’を‘[h]’として捉えることとする。
- 9 <独立新聞>の社長兼主筆であった徐載弼（1864～1951）の母の実家が全南の宝城という事実鑑みれば、このような‘twolu-’の用法を全南方言の反映としてみなす余地もある（崔銓承2009）。
- 10 Næss（2007）では、行為者が典型的な行為者であるほど、また対象が典型的な対象であるほど、他動性が高いということが示されている。
- 11 ‘twol-a-ka-’は中世韓国語の時期から、主に“帰る”の意味で使われる。また、17世紀以降、“進行していく”の用法も見られる。しかし、“交代する”の意味への拡張はつい最近のことだと思われる。文献上“交代する”の例と見なされるのは次の一例のみである。
 흔 等은 이 求廻여 도라가는 致仕官이오 흔 等은 이 식여 도라가는 致仕官이오 흔 等은 이 所차 도라가는 致仕官이니 아디 못게라 (一等是求回的致仕官 一等是差回的致仕官 一等是趕回的致仕官 不知兩位相公) <1721 五倫全備言解 8: 36b>

参考文献

- 安秉禧. 1959. 『十五世紀 國語의 活用語幹에 對한 形態論的 研究』 國語研究 7.
 安秉禧・李珧鎬. 1990. 『中世國語文法論』 서울: 學研社.
 Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge, MA: MIT Press.
 崔鉉培. 1937/1971. 『우리말본』 正音文化社.

- 崔銓承. 2009. 「國語 地域 方言에서 일어난 意味 變化의 一般的 發達 傾向과 換喩와의 相關性-全羅方言에서 ‘도르다/두르다’ 形의 意味 轉移(欺>盜)의 境遇를 中心으로」, 『國語史와 國語方言史와의 만남』 273-323. 서울: 역락.
- 韓在永. 1985. 「中世國語 聲調에 關한 一考察: 特히 被動詞와 使動詞의 派生을 中心으로」 『國語國文學』 93:413-429.
- Haspelmath, Martin. 2003. The geometry of grammatical meaning: semantic maps and cross-linguistic comparison. In Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure v.2*, 211-242. Lawrence Erlbaum Associates.
- 許雄. 1975/1995. 『우리옛말본-15世紀 國語 形態論-』 샘文化社.
- Hopper, Paul, and Elizabeth Traugott. 2003. *Grammaticalization* (2nd edition). New York: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul, and Sandra Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56(2):251-299.
- 張允熙. 2002a. 「國語 動詞史의 諸問題」 『韓國語意味學』 10:97-141.
- 張允熙. 2002b. 「現代國語 ‘르-末音’ 用言의 形態史」 『語文研究』 14(2):61-83.
- 河崎啓剛. 2011. 「‘얼다’[結婚, 交合]와 ‘얼운’[成人]에 대하여」 『國語學論集』 7:27-58.
- 金鉉. 2001. 「活用形의 再分析에 依한 用言 語幹 再構造化-喉音 末音 語幹으로의 變化에 限하여」 『國語學』 37:85-113.
- 金圭哲. 1989. 「두 使動文의 完結性」 『陸士論文集』 37: 5-18. [金圭哲. 2005. 『單語形成과 圖像性에 對한 研究』 347-362. 서울: 박이정.]
- 金圭哲. 1995. 「國語 使動文의 名稱과 意味」 『陸士論文集』 28: 43-68. [金圭哲. 2005. 『單語形成과 圖像性에 對한 研究』 363-392. 서울: 박이정.]
- 金圭哲. 2001. 「다시 두 使動文의 意味를 찾아서」 『國語 研究의 理論과 實際(李珣鎬教授 回甲記念論叢)』 763-791. 太學社.
- 金星奎. 1987. 『語彙素 設定과 音韻現象』 國語研究 77.
- 金星奎. 1995. 「‘사 다’類의 派生語」, 南鶴李鍾徹先生 回甲記念論叢 刊行委員會(篇) 『韓日語學論叢』 381-394. 國學資料院.
- 김성용. 2009. 「움직임-方式 動詞 ‘돌다’, ‘구르다’의 意味 連鎖 構造」, 慶熙大學校 人文學研究所. 『人文學研究』 15:27-51.
- Kittilä, Seppo. 2011. Transitivity typology, In Jae Jung Song (ed.), *The Oxford Handbook of Linguistic Typology*, 346-367. Oxford University Press.
- 高正義. 1990. 「使動法」, 서울大學校 大學院 國語研究會(編) 『國語研究 어디까지 왔나』 500-510. 서울: 東亞出版社.
- 具本寬. 1998. 『15世紀 國語 派生法에 對한 研究』 國語學叢書 30 서울: 太學社.
- Langacker, Ronald. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 李賢熙. 1987. 「中世國語 ‘둔겁-’의 形態論」 『震檀學報』 63:133-150.
- 李賢熙. 1994. 『中世國語構文研究』 서울: 신구문화사.
- 李基文. 1962. 「中世國語 特殊 語幹 交替에 對하여」 『震檀學報』 23:120-153.

- 李基文. 1972. 『國語史概説』 太學社.
- 李相億. 1980. 「使動·被動語幹形成接尾辭에 對한 多角的 考察」, 安巖語文學會, 『語文論集』 (): 121-138.
- 梶山洋介. 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」 『認知言語学論考』 1:29-58. 東京: ひつじ書房.
- Næss, Åshild. 2007. *Prototypical Transitivity*. Amsterdam: John Benjamins.
- 朴鎮浩. 1994. 『統辭的 結合 關係와 論項 構造』 國語研究 123.
- Shibatani, Masayoshi. 1973. Lexical vs. periphrastic causatives in Korean, *Journal of linguistics* 9:281-298.
- Shibatani, Masayoshi. 1975. On the nature of synonymy in causative expressions, 『語學研究』 11(2):267-274.
- Shibatani, Masayoshi. 2000. Introduction: some basic issues in the grammar of causation, In Masayoshi Shibatani (ed.), *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, 1-22. John Benjamins Publishing.
- 志部昭平. 1990. 『諺解三綱行實圖研究』 東京: 汲古書院.
- 宋喆儀. 1992/2008. 『國語의 派生語形成 研究』 2版 國語學叢書 18 冊: 太學社.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization pattern: semantic structure in lexical forms, In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description 3: Grammatical categories and the lexicon*, England: Cambridge University Press. [Leonard Talmy. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*, v.2, 21-146. The MIT Press.]
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 연재훈. 1997. 「他動性の 定義를 爲한 原型理論的 接近」 『言語』 22(1):107-132.

コーパス

主要語彙用例集

國語史資料말뭉치

オンライン資料

國立國語研究院, Digital Hangeul 博物館 (<http://www.hangeulmuseum.org/>)

國立國語研究院, 標準國語大辭典 (http://www.korean.go.kr/08_new/index.jsp)

國立國語研究院, 21世紀 世宗計劃 (<http://www.sejong.or.kr>)

奎章閣韓國學研究院 (<http://e-kyujanggak.snu.ac.kr/>)

文化財廳, 國家記錄遺產 (<http://www.memorykorea.go.kr/>)

韓國史 Data Base, (<http://db.history.go.kr/>)

CBETA 中華電子佛典協會, CBETA (<http://www.cbeta.org/>)

略語一覽

ACC	accusative	COND	conditional
ADV	adverbial ending	CONN	connective ending
CAU	causative	COP	copula

DAT dative
GEN genitive
GER gerund
HON honorific marker
IND indicative
INTS intensifier
LOC locative
NOM nominative

OM object marker
OPT optative
PAST past tense
PL plural
PROPOSE proposal ending
SG singular
1st 1st person